

特別史跡 旧閑谷学校

今から約360年前の寛文6(1666)年、岡山藩主池田光政は、閑谷の地を訪れました。ここに祖先のお墓を造ろうと考えていましたが、山に囲まれた静かな雰囲気気が気に入り、学校を建てようと思いました。

そして、4年後の寛文10(1670)年、家来の津田永忠に命じて学校の建築がはじまり、約30年をかけて現在のよう閑谷学校の姿が出来上がりました。

【閑谷学校の沿革】

寛文6(1666)年 岡山藩主池田光政が和気郡木谷村延原(後に閑谷)を視察

寛文10(1670)年 池田光政が津田永忠に命じ閑谷学校を創立

延宝元(1673)年 講堂(旧)が完成し、池田光政が視察。翌年、聖堂(旧)が完成

貞享元(1684)年 新聖堂(大成殿)が完成
貞享3(1686)年 初めて稲葉が挙行された。東御堂(後の芳烈祠、現在の閑谷神社)完成。

元禄14(1701)年 聖像(孔子像)ができ、大成殿に安置。石堀着工。備前焼瓦葺の新講堂が完成。

元禄15(1702)年 御納所・椿山が造られ、光政の髪・爪が納められた。

宝永元(1704)年 芳烈公の金銅坐像(光政像)が鑄造され、芳烈祠に安置されました。

明治3(1870)年 藩政改革により閑谷学校廃校、岡山学校に併合

明治6(1873)年 中川横太郎、岡本巍らの発意により山田方谷が教授役に招かれ閑谷学校(閑谷

精舎)再興

明治17(1884)年 西毅一を教頭(後に覺長)として閑谷覺を開校

大正10(1921)年 岡山県に移管され、岡山県閑谷中学校となる。

昭和23(1948)年 学制改革に伴い、閑谷中学は岡山県立閑谷高等学校となる。

昭和25(1950)年 文化財保護法の制定。講堂、聖廟、神社等25棟が重要文化財に指定

昭和28(1953)年 講堂が国宝に指定
昭和29(1954)年 特別史跡に指定

昭和40(1965)年 岡山県立和気高等学校を岡山県立和気閑谷高等学校に改称

岡山県青少年教育センター閑谷学校開設
平成3(1991)年 教育センター新設。旧教育センターを資料館に改修

旧閑谷学校は平成27(1995)年、茨城県水戸市の「旧弘道館」、栃木県足利市の「足利学校跡」、大分県日田市の「咸宜園跡」とともに、「近世日本の教育遺産群 ―学ぶ心・礼節の本源―」として日本遺産の第1号に認定され、現在は4市連携して世界遺産登録を目指しています。

今から350年も前、池田光政が閑谷学校を創ったのは、素晴らしい社会をつくるためには学問が必要であると考えたからです。

〽閑谷学校ってどんな学校?〽

閑谷学校では、学房という教室で、朝早くから夜遅くまで字を習ったり、大きな声で本を読むなどの勉強をしていました。また、一日、六日、十一日、十六日など一と六のつく日に、一番大きな講堂で、

偉い先生の特別な授業がありました。

また、閑谷学校までが遠くて通えない人のために月に一度、誰でも受けられる授業をしていました。閑谷学校の先生たちも外に出かけて授業をしました。

たくさんの方が、勉強する大切さを知ったのです。

閑谷学校の時間割

【備陽国学記録】(岡山大学附属図書館 池田家文書)文化11年条から作成

	7時～	10時～	12時～	13時～	16時～	18～22時
1・6が 付く日	自習	(講堂) 四書の講釈 (習字所) 習字・素読の復習		自習	休憩 など	自習
2・7が 付く日		(習字所) 習字清書、素読 の復習				
3・8が 付く日		(習字所) 習字・素読	自習	(習芸斎) 五経などの講釈 講義実習、一人ずつ素読		
4・9が 付く日		(習字所) 習字・素読		自習		
その他 の日	お休み・沐浴					

※午後4時ごろから6時ごろの休憩時間を除いて、朝7時ごろから夜10時頃まで寸暇なく勉強するよ
うに、と定められていました。

※学習のスケジュールは5日が1つの単位となつており、4日間の学習の後、5日目は休みになります。
閑谷学校の教育の中心は儒学です。

入学すると、まず習字と四書五經の素読を行います。
四書：「論語」「大学」「中庸」「孟子」
五經：「易經」「詩經」「書經」「礼記」「春秋」

閑谷学校での勉強

閑谷学校の授業では『論語』などの『儒学』が教えられました。『儒学』とは孔子の教えをもとにした学問です。孔子は、今から2500年ほど前に中国（山東省曲阜市）で生まれました。当時の中国は世の中が大変乱れていました。孔子は、みんなが安心して生活できる世の中を作るには、どうすれば良いかを考えました。力で相手を抑え込むのではなく、人間としての正しい生き方を学ぶことによって、すばらしい社会をつくろうとしました。この『儒学』の教えは1700年ほど前に日本に伝わり、寛政9（1797）年に寛政異学の禁が通達され、昌平坂学問所が幕府直轄の学府となって以降、諸藩に次々と藩校が開かれ、日本中に広がりました。

岡山藩で、藩校が寛文9（1669）年、閑谷学校が寛文10（1670）年に開校されたのは先駆的であつたのです。

儒学の教え

『儒学』の中心になっている教えは「仁」や「礼」です。これは「相手を思いやる心や態度」のことです。『論語』の中にも多く出てきます。その代表的な

のが「己の欲せざる所は、人に施すこと勿（なか）れ」（自分にして欲しくないことは、人にしてはいけない）です。そして、孔子が亡くなつた後、孔子の教えを弟子たちが本にまとめました。それが『論語』です。『論語』の中にみられるこれらの教えは現代を生きる私たちにとても学ぶことが多くあります。

「仁」…人を思いやる心
「義」…人としての正しい道
「礼」…人と人が調和して生きること
「智」…人が身に着ける知識や知恵
「信」…約束を守る誠実さ

孔子は、仁と礼とともに兼ね備えたありようを人間の理想としました

熊沢蕃山と池田光政

池田光政は、姫路藩主、鳥取藩主をへて寛永9（1632）年、24歳の時に岡山藩主になりました。光政はとても勉強が好きで、「儒学」もしっかり勉強し、人々のことを一番大切に思っていました。その頃、岡山では人々が飢えに苦しんだり洪水にあつたりしましたが、その度に光政は人々を助けたので、優れた藩主である「名君」とみんなに呼ばれました。

熊沢蕃山は、16歳の時、岡山藩に仕え、一生懸命武芸に励んでいたことで光政に大変気に入られました。しかし、蕃山は、武芸だけではなく学問も必要な時代になってくると思うようになり、岡山藩をやめ、現在の滋賀県に住んでいた儒学者の中江藤樹の弟子になりました。そこで出会った「陽明学」の「知ることと実行することは一つである（知行合一）」という考えを政治に活かそうとしました。

正保2（1645）年、29歳の時に再び光政に仕え

た蕃山は、「今まで勉強してきたことを、岡山のために役立てたい！」と強く思いました。一方、光政も「よい国づくりのためには、まずは政治を行う武士が勉強する場所が必要だ。」と考え、岡山のお城近くに武士のための交流の場である「花畠教場」をつくりました。陽明学を政治に活かすことは幕府からよく思われないこともありましたが、やがて藩校や閑谷学校がつくられることにつながり、岡山藩の教育の基礎を築くことになりました。

津田永忠

津田永忠は、土木技術に非常に優れていたので、岡山藩主・池田光政やその息子・綱政の命を受けて庶民のための閑谷学校や日本三名園の一つ後楽園をつくりました。このほかにも岡山城下を洪水から守るために百間川をつくったり、海に堤防を築いて新しい田や畑を開き、そこに水をそそぐための用水路もつくりました。津田永忠は、光政から「国中に並ぶものがない」と言われるほど優秀であつたため、多くの大切な仕事を任せられ、岡山発展の基礎を築きました。

永忠は、年をとると、閑谷学校の近くに住んで、学校を見守りました。



津田永忠宅跡（閑谷）

閑谷学校の建物

閑谷学校は、津田永忠がつくった代表的な建造物のひとつです。閑谷学校が完成した時には池田光政はすでに亡くなっていましたが、光政の思いをくんで現在のようになすばらしい建物を完成させました。

建物の屋根には、そのほとんどに備前焼の瓦をふき、床や柱には櫟や檜の材木を用い、建物の基礎部分や学校を取り巻く塀には頑丈な石を使っています。

また、講堂・聖廟・泮池など儒学を学ぶために必要な施設がすべて整っています。



昭和61年頃の閑谷学校全景(出典:岡山県立記録資料館)

閑谷学校は、日本で最も古い庶民のための学校であり、今も当時のままの状態が残っているため、ほとんどの建物が国の重要文化財に、中でも講堂は国

宝に指定されています。そして、平成27(2015)年には「近世日本の教育遺産群―学ぶ心・礼節の本源―」として日本遺産に認定されました。

旧閑谷学校は標高220m程の丘陵の南斜面に延長約765mの石塀をめぐらせて校地を画し、その南の茶畑跡と泮池一带が旧閑谷学校として特別史跡に指定されています。さらにその東隣の椿山及び東方の黄葉亭、津田永忠宅跡、学校の南1km地点にある学校の入口門である石門が附属指定となっています。

孔子のお祭り『釈菜』

旧閑谷学校には、儒学に傾倒した藩主光政によってつくられた儒学の祖・孔子を祀る聖廟(聖堂)があります。

この聖堂内に安置されている孔子像に供物を捧げ、孔子の徳を称える行事が「釈菜」です。



釈菜「大成殿の儀」

旧閑谷学校の釈菜は、貞享3(1686)年8月5日、津田永忠、小原大丈軒らによって執り行われたのを初めてとして閑谷の地でずっと受け継がれてきました。

明治3(1870)年、学校閉鎖に伴い一旦途絶えましたが、大正4(1915)年10月に復活、現在も毎年10月第4土曜日に行われ「最も慎ましやかで最も厳粛」と評される旧閑谷学校の伝統行事です。

孔子を祀る聖廟を開帳し、供え物や漢詩を捧げる

「大成殿の儀」、国宝の講堂で論語を学ぶ「講堂の儀」、孔子像の前から下げたお供え物を参加者で分かち合う「分胙の儀」で構成されています。

現在は、岡山県立和気閑谷高等学校の教職員が祭官を務め、棗、栗や鶏肉など5種類の品が供えられた後に、香が焚かれ、お酒が地面に注がれます。次に孔子の教えや行いのすばらしさを褒め称える献詩が読まれます。令和2年は、閑谷学校創学350年の年にあたることから、祭官等が袴(かみしも)を着て江戸時代の様子を再現しました。

備前市は、茨城県水戸市、栃木県足利市、大分県日田市と組んで、「近世日本の教育遺産群―学ぶ心・礼節の本源―」というストーリーで、平成27年に日本遺産第1号として認定を受けています。「釈菜」は、その構成文化財のひとつとして、ストーリーの中に位置づけられています。

廃藩置県で閑谷学校は、池田家から離れましたが、その後も閑谷精舎、閑谷塾、閑谷中学と教育の伝統は脈々と続き、岡山県立和気閑谷高校に継承され、現在は、特別史跡旧閑谷学校の保護・活用と健全な青少年を育成することを目的として設置された、岡山県青少年教育センター閑谷学校において、国宝の講堂を活用した論語体験や、300年以上も持続する特別史跡旧閑谷学校の様々な工夫を探访する文化体験の機会を提供しています。

閑谷学校の危機と再興

明治維新の廃藩置県・学校令の施行などの大改革の中で、すべての藩校が閉鎖され廃校になります。

江戸時代に約200年間続いた閑谷学校も、明治3（1870）年閉鎖になり、閑谷学校の土地や建物は明治の新政府に取り上げられました。

しかし、旧岡山藩士の人々や地域の人々が閑谷学校の再開に立ち上がり、土地や建物の払い下げを明治政府に願ひ出るとともに、儒学者で詩人の山田方谷先生を招き、『閑谷精舎（しょうじゃ）』として再興（明治6（1873）年）。数年後、閑谷精舎は閉鎖になりましたが、地域の人たちの力で『閑谷齋（こうく）』として再興（明治17（1884）年）。教頭（後に齋長）には、西穀一先生がなりました。その後、旧制中学校、新制高等学校として歴史は続き、現在は岡山県立和気閑谷高等学校や岡山県青少年教育センター閑谷学校がその歴史を受け継いでいます。

山田 方谷

備中松山藩の藩政改革で有名ですが、閑谷学校を再興した人物でもあります。旧岡山藩士らは、方谷を迎えて岡山に学校を設けることを計画しましたが、これに対して方谷が閑谷学校の再興を提案しました。69歳の高齢で小阪部塾（新見市）をかかえていたため、春・秋2回、各々1〜2か月ほど来校することになりました。開校当時、生徒は20人程度でしたが、翌年には100人近くまで増えました。



山田方谷
(出典:近代日本人の肖像)

西 穀一（薇山）

明治14（1881）年、閑谷保覺会を設立して募金活動に乗り出し、同17（1884）年8月、閑谷齋として開学を果たします。妻と二人の娘を伴い、一家を挙げて岡山から移住。以来、亡くなるまでの20年間、教頭、初代齋長、最後は私立閑谷中学校の校長として、再興に身を捧げるようになりました。



西 穀一（薇山）

閑谷学校資料館（旧閑谷中学校本館）

現在の閑谷学校資料館の建物は、岡山県技術職員として活躍した江川三郎八による明治擬洋風建築の校舎で、国の「登録有形文化財」に登録されています。もともと閑谷中学校の校舎で（正確には、閑谷学校が私立閑谷中学校となつて2年後、明治38（1905）年2月に完成）、当時は初代校長の西穀一（薇山）の志を継いだ岡本巍が校長に就任していました。その後、岡山県閑谷中学校、戦後には岡山県立閑谷高等学校、岡山県立和気高等学校閑谷校舎となり、昭和39（1964）年本荘校舎への統合により閑谷校舎の学校としての役割は幕を閉じます。資料館の建物には幾多の生徒たちの歴史が詰め込まれています。

閑谷学校ゆかりの人々

江戸時代には多くの人が閑谷学校で学び、地域や日本を支える人になりました。

中でも、播磨国（現兵庫県上郡町）の出身、閑谷学校で5年間勉強した大鳥圭介は、幕臣となり戊辰戦争で五稜郭を占拠し、新政府軍と戦い、敗れ、とられますが、維新後は許され工部大学校（東京大学工学部の前身）校長や学習院院長、清国公使など、明治新政府の要職をつとめ、明治の近代化に大きな役割を果たしました。



大鳥圭介
(出典:近代日本人の肖像)

また、明治時代になつて閑谷学校の伝統を受け継いだ『閑谷齋（こう）』や、その後の旧制中学校で学んだ人の中にも、多くの著名人がいます。

大原美術館の設立者であり倉敷の基礎を築いた大原孫三郎は、明治27（1894）年閑谷齋に入学しています。

広く愛唱される童謡「赤とんぼ」を作詞した三木露風は、15歳の時に兵庫県立竜野中学から閑谷齋の三年生に転校しています。



三木露風
(出典:近代日本人の肖像)

小説・随筆・戯曲など数多くの本を出版して文化勲章を受賞した正宗白鳥は、現備前市穂浪の生まれで、明治25(1892)年閑谷塾に入学し、漢学と英語を学んでいます。

「西風の風いだ後入江は鏡のよう」

漁船や肥舟は眠りを促すような艀の音を立てた」

正宗白鳥



正宗白鳥
(出典:近代日本人の肖像)

備前焼作家で人間国宝になった藤原啓は、私立中学閑谷塾に進学。中退して上京し、文学、演劇、絵画、音楽にも傾倒した後、38歳で帰郷し、翌年備前焼作家となり、人間国宝にまでなりました。



藤原 啓



藤原 審爾

直木賞作家で多くの作品がドラマ・映画化された藤原審爾は、幼少期に両親を失くし、父の郷里備前市片上で祖母に育てられながら私立中学閑谷塾に入学しています。

「うるさけれども親にまさるものはなし」

藤原 審爾

旧閑谷学校がなぜ大切なのか、

なぜ世界遺産を目指しているのか

現存する学び舎

最も大切なことは、旧閑谷学校は「本物がそこにある」ということです。国宝の講堂など建物、石堀がほぼ建てられた当時の姿で現代に伝わっています。その間、政治・経済的な要因で取り壊しの危機に直面しながら、地域の人々の英知で存続を図ってきました。しかも時とともに教育制度は変わりますが、その変化に合わせて、現在まで学びの施設として機能してきたことも評価されます。その背景には、教育システムを単独で考えたのではなく、学校がある閑谷新田村の中に学田・学林を作り、隣接する井田村にも中国周代の統治制度を用いた干拓地を作って学校経営に当たりました。学校運営を支える財政基盤を整えることこそ、閑谷学校に永続性があるともいわれる理由です。

先進的な教育

閑谷学校が創立された頃は、特権的な階級のための教育が行われていましたが、村方のリーダーを養成するなど庶民の学びを目的としながらも、武士階級や他地域の子弟も受け入れました。開校当初は学びの徒も集まらず、池田光政の理想とはかけ離れた様子だったようですが、学校の学びや運営に庶民出身者を登用するなど、文化・文政期(1804年～1830年)には盛んになります。すべての人に学びの機会を与え、しかも村方のリーダーの学びの意欲を運営システムに取り込むという、二つの点で先進性を持っていました。

「学び」の原理と世界遺産

現代は学校教育の問い直しが多様な場面で見られます。これは現在の学校教育が、西洋近代の原理に基づくものである一方、これとは異なる儒学に基づく東アジアの学問や学びの普遍性を閑谷学校の将来性や可能性の中に発見できるとも説明ができます。これは世界遺産として旧閑谷学校を発信する意義となるでしょう。

旧閑谷学校の建物・構造物には機能を超えた強固さ、精緻な技巧、適確な運営管理のための工夫が様々な見られますが、これらは、すべて旧閑谷学校の永続性を願う創立者の理想であるといえます。機能性の高さに呼応する趣向の質の高さ、周辺の自然の美しさと調和する建物配置のバランスなど旧閑谷学校には芸術性があります。

自然との共生

最後は自然との共生です。地球規模で物事を考えなくてはならなくなった現代、人類は「持続可能な世界をつくるため」には何をしなくてはならないか、現代の人類に突きつけられている課題でもあります。そういう意味においても、自発的な学びに基づく教育、自然との共生という強いメッセージを発信できる具体的な場所として、旧閑谷学校は相応しいものです。

〔引用元〕

令和2年度広報びぜん「閑谷学校 創学350年」

【余話】

閑谷学校資料館に、六面三双の屏風が保管されています。これは、1680年頃閑谷学校の教授役を務めた、小原大丈軒（寛永14（1637）年～正徳2（1712）年）の書です。

小原大丈軒（名は正義、字は伯実、通称は善介）は、美濃国（現 岐阜県）の藩士の出身で、その好學ぶりは漢学・医学・兵法・神道などの多岐に及びますが、寛文3（1663）年、京都の米川操軒に師事し朱子学を納めます。延宝元（1673）年岡山藩校の講官として池田光政に招かれその侍講もつとめます。綱政の頃には学監の任にあつて、閑谷学校へも度々足を運ぶことになりました。

この屏風は、日生町在住の中野氏から寄贈されたもので、中野氏は代々廻船業に携わっており、先祖が景氣の良いときに手に入れたものらしいということです。中野氏は、閑谷学校で学んだ経歴があり、閑谷学校の教授役である小原大丈軒が書いた屏風を所持していたことは、興味深いことです。

最初の一雙の屏風の文字、

「志士不忘在溝壑」

勇士不忘喪其元」は、

「志士は溝壑（こうがく）に在るを忘れず

勇士は其の元を喪（うしな）うを忘れず」

と読みます。

これは「孟子」のことばで、

志士たる者は、常に志の途上で殺され道端の溝に棄てられることを覚悟せねばならない。

勇士たる者は、義のためなら自らの首が敵に切り落とさせることを恐れずはいいけない。

という意味だそうです。

次の二雙の屏風の文字、

「振衣千仞岡

濯足萬里流

海濶從魚躍

天空任鳥飛

月到梧桐上

風來楊柳辺

珠茂澤自媚

玉蘊山愈輝」は、

「衣を振る千仞の岡

足を濯ぐ萬里の流れ

海は濶（ひろ）くして魚の躍るに従ひ

天は空しくして雲の飛ぶに任す

月は梧桐の上に到り

風の楊柳の辺りに來たる

珠茂くして澤自ら媚なり

玉蘊（つも）りて山愈々輝けり」と読みます。

最初の2行は「左思」の詩で、

高い山で俗塵を払い落とし、俗世間で着いた足の

穢れを長い川の流れて洗う。

次の2行は「古今詩話」に記載されている句で、

海は広々として自由に魚をおどらせ、大空は雲一

つなく鳥が飛ぶのにまかせている。

次の2行は、

月は自然と梧桐の上に出て絵になり、風は柳の辺

りに吹いて枝葉を優雅に揺らして風情を醸す。

最後の2行は、

珠は沢に埋もれていても、自然と美しさが現われ

る。玉は山の土に覆われていても光が漏れ出る。

という意味のようです。

